

北辰

TOKYO

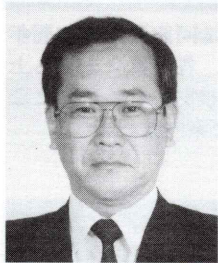


岐阜県立多治見北高等学校同窓会
東京支部会報 第17号
2003年9月28日

「同窓会の着実な発展を期して」

多治見北高等学校同窓会・東京支部

会長 愛知紘治 (1 回生)



北高同窓会東京支部会員の皆様にはお元気にお過ごしのこととお喜び申し上げます。東京支部は今年14年目を迎えました。前任の鈴木満会長からバトンタッチを受け、早や3年経過。鈴木元会長からの「継続は力なり」との言葉を引き継ぎ、着実に発展しております。会員皆様のボランティア精神溢れるご支援・ご協力に心から感謝申し上げます。

本同窓会の目的は会則で「会員相互の親睦を図り、本部と連繋をとり、母校の発展に寄与すること」とされており、最近、会員相互の親睦、連繋、コミュニケーションがより深く、より緊密になって来ていることを実感しております。例えば東京支部会員（女性）がベンチャービジネスを立ち上げた時、同期生、同窓生が暖かい支援の手を差し伸べた事例。また、支部会員（彫刻家）の活動に東京支部会員はもとより、関西支部会員から心強い支援があった事例。さらには同期生グループの集い、各回生毎の同期会の開催が多くなってきていることなどいろいろございます。

このような同窓生の連繋の深まりは本部、支部の同窓会活動の活性化と関係があるように思われます。今年6月関西支部の総会が奈良で開催され、東京支部会長として初めて参加させて頂きました。吉田新会長のもとに約30名の会員が参加、関西支部同窓会活動の新たな胎動を感じました。この席で、関西支部会員から上記東京支部会員の彫刻家としての活動に熱心な支援の呼び掛けがあり、同窓会、同窓生に寄せる熱い思いを強く感じて帰りました。同窓会の活動が同窓生の連繋、ヒューマンネットワークの形成に役立っていることを身を持って感じた次第です。

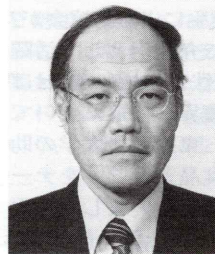
同窓会本部、母校との連繋も軌道に乗って参りました。同窓会活動が母校の発展、同窓生1人1人の発展に繋がることを期待し、同窓生の強い連帯感が多治見北高校の伝統になればと期待しております。東京支部の会員の皆様には支部活性化活動の一つとして、昨年度に引き続き、東京、神奈川、埼玉、千葉での「地域毎の集い」を推進して参ります。横浜では昨年より開催、既に軌道に乗って来しております。各地域の理事から開催案内がありましたら、是非参加して頂きたいと思っております。

さて、今年も11月8日（土）、第14回東京支部総会・フォーラム・懇親会を故郷多治見より来賓を迎え、昨年と同じ新宿モノリス29にて開催します。今年の幹事は4、14、24、34回生です。総会案内等詳しくは本会報最後のページにございます。

会員の皆様には同期生、先輩・後輩に声を掛け合って、万障繰り合わせの上、是非参加して頂きますようお願い致します。

「北辰」考

岐阜県立多治見北高等学校
校長 下畑 五夫



多治見北高等学校同窓会東京支部の皆様には、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

さて、この度の異動で飛騨子供相談センターから、土肥勇賢校長先生（御退職）の後任として去る4月に着任いたしました。多治見北高等学校は、優秀な卒業生を多数輩出していることで有名なことは、異動が決まる前から知っていました。そして、四月以降本校に勤め始め、世間の評判通り卒業生はもちろんのこと生徒達も自主・自律・自学の校訓を指針として学業に励んでいる姿に接し、改めてすばらしい学校であると実感しています。より一層の発展のために、本校の学習環境をハード面・ソフト面の両面にわたってさらに整えたいと考えています。

ハード面では、校舎（本館）改築が、今年度調査費がつきいよいよ実現に向けて具体的な作業を開始しました。しかし、財政難時代でもありまだまだ乗り越えねばならぬ問題がありますが、若尾会長を初めとして同窓会の皆様やPTAの皆さんの全面的なバックアップやお力添えをいただきながら、一日も早い新校舎完成を目指したいと努力しています。

また、ソフト面では、これも同窓会の皆様のご協力を得て実施していることですが、総合的学習時間においてそれぞれの分野で活躍されている同窓生の方々に講師をお願いしています。もし、依頼がありましたら後輩のために是非お引き受けくださいますようお願いいたします。

さて、この会報の名称でもある「北辰」について触れてみたいと思います。昭和63年に「北辰30年誌」が発刊されています。この本によると、昭和44年にそれまで創立記念祭と呼んでいたものを「北辰恒に座を変えず」とあるように、いつもその座を変えず北極星のごとく中心的立場に立とうという

気持ちを込めて「北辰祭」としたとある。そして、このころ県下で唯一の65分授業を開始しています。創立10年を過ぎおおいに、飛躍を始めんとした時期にあたっています。

この「北辰」という言葉は、北極星の別名ですが、単に星の名称と言うよりは神格化された時の名称でしょう。この星を中心として、他の恒星が回転するように見える、また、古くから方位を知る大切な手がかりとされたところから尊い星として信仰の対象になっていきました。中国では北辰信仰と並んで北斗信仰も盛んで、やがてこれらが混合して、北辰北斗信仰として、日本にもたらされてきました。これは、北斗七星が、北辰の命を受け人間の運命を支配するというものです。平安時代には、宮中では3月3日、9月3日の両日に北辰に

灯を献ずる北辰祭が行われています。そして、民間でも行われるようになり神道と結びつき北辰社、妙見社などの祠が建てられ信仰のよりどころになってきました。

このように由緒ある「北辰」が多治見北高校の指針として、また心の拠り所としてこの虎渓山山麓の学園に現れたのは、歴史の必然性のようなものを感じます。

現在、北辰（北極星）を名のっている星は、こぐま座 α 星です。天の北極から約1度離れています。12000年後には、ベガ（織女星）が北辰を名のるようになります。

本校が、これからも北辰の地位を保つべくより一層自主・自律・自学の気風に満ちあふれた学園づくりに努力したいと考えています。

北高45周年記念総会に向けて

多治見北高等学校同窓会会長 若尾賢治

北高同窓会東京支部会員の皆様には、益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。日頃は同窓会活動に格別のご協力を賜り厚く感謝申し上げます。多治見にて本部役員会を開催する毎に愛知会長より北高同窓会東京支部の活動報告を伺い役員、会員の皆様方の同窓会そして母校に対する熱い思いが伝わってまいります。

6月の本部役員会で学校状況報告を新たに着任された下畑校長先生より受けました。センター試験の平均点が県下岐阜高校に次いで2位となり、また最終的な合格者数は例年並みだが難関校への合格者数が増加し、北高の実力が発揮できたとのことです。これは学校当局の指導はもとより、先輩各位が各界でご活躍をされていることが大きな礎となっていることと確信しております。また念願の校舎改築につきましては6月末高橋岐阜県教育長、渡辺県議会議長に早期実現に向けて再度陳情を行い、好印象を受けました。現在は調査費も下り基礎設計の段階に入っているようです。

また、本年も総合学習の一環として卒業生による講演会が7月14日、15日両日に行われました。地元で弁護士として活躍されている尾関恵一先生（2回生）は「司法への道」‘成せば成る’をタイトルに弁護士の仕事から法曹界への道について講演。東京支部より推薦していただいた、東京薬科大学の助教授である加藤哲太先生（6回生）は、「食品とガン」をテーマに「肝臓の機能と薬」について模擬講義を行いました。両講義ともに生徒達の進路選択にもつながる興味深い講演で、大きなアドバイスとなっていると報告がありました。

この「北辰TOKYO」が皆様方に届く頃にはその行方が伝わっているかと思いますが、今年も北辰ゴルフコンペが開催

されます。当番回生である4回生、14回生のお世話により、9月14日に春日井カントリークラブで開催されます。毎回100名前後の大会となり次第に定着しつつある集い、世代を超えた集いの中で一つでも多く情報交換が出来、有意な一日となることを願っております。

さて月日の経つのは早いもので、来年は同窓会創立45周年の総会を開催する年となりました。現在、各委員会を立ち上げることについて9月13日の本部役員会で検討されることとなっておりますが、現在までの決定事項をご案内致します。

- ①開催日 平成16年3月21日（日）
- ②会場 セラミックパーク国際会議場
- ③時間 13時30分受付～
総会及び講演会14時～
懇親会16時～

交通アクセスは多治見駅よりシャトルバスを運行する予定で、改めて紹介させていただきます。当日は同窓会東京支部より加納宣康氏をご紹介します記念講演を行います。

5年目の総会です。旧友との親交を深められてはいかがですか。また、日本の最先端医療技術の権威者加納先生の講演を聴講されてはどうでしょうか。そして、昨年10月オープンしました文化施設（現代陶芸美術館）と産業メッセ施設（展示ホール、国際会議場等）の複合施設「セラミックパークMINO」を一度は見学されてはいかがでしょうか。大勢の皆様方にご参加いただきますようお願い申し上げます。

最後になりましたが東京同窓会の益々のご発展と皆様のご多幸を祈念いたしますとともに多治見北高同窓会への一層のご支援を賜りますよう切にお願いいたします。

社会の変化と同窓会について考える

関西支部会長 吉田美喜夫（8回生）

日本の状況をどのように見るか。私には「農耕定着民族」から「遊牧移動民族」への転換過程にあるように思える。もとより、すでに農業はわが国の就業構造上、その占める位置は小さい。ここで「農耕」という表現をとったのは、かつて家族や地域や村といった農業を基盤として成立していた「部分社会」が崩れつつあることを言いたいためである。しかも、これらの帰属集団に代わるものとしての「会社」がそのような役割を後退させつつあるという。たとえば、「永年勤続表彰制度」は、大正時代に各企業が熟練工を獲得・定着させるために導入し今日に至ったものであるが、今日では「早期退職優遇制度」に見られるように、「永年勤続」は必ずしも評価されない（朝日新聞2003年7月2日付け）。また、社葬が急減しているという（朝日新聞2003年7月4日付け）が、これも会

社という共同体が崩れている兆候であることは間違いない。このような傾向を好ましいとは思わないが、一旦、社会的風潮ないし通念として新しい価値が形成されると、容易なことでは転換しない。しかしながら、会社への帰属意識が薄れてきた反面、別の対象への帰属が求められる可能性があり、その対象となる候補の一つは同窓会だという。これは大垣尚司氏の所説であるが、同窓会の幹事としては強い励ましを受けた思いがする。ただし、同窓会が単に過去への追想に終わる団体では長続きしないであろう。コンテンツと人脈が重要である。わが同窓会関西支部はこのいずれも開発途上というべきである。

ところで、関西支部では、去る6月8日(日)、昨年の京都に次いで、いわば古都めぐりという趣向で、古都奈良の宿「飛鳥



奈良での関西支部総会

奈良での関西支部総会。飛鳥荘を会場に第12回総会と懇親会を開催した。会場の様式は座敷であり、これまでのホテルなどの場合と違い、お膳を前に文字通り膝を突き合わせ、久方ぶりの会話が弾んだ。飛鳥荘は猿沢池畔にあり、会の終了後、興福寺などの散策を楽しむことができた。

飛鳥荘を会場に第12回総会と懇親会を開催した。会場の様式は座敷であり、これまでのホテルなどの場合と違い、お膳を前に文字通り膝を突き合わせ、久方ぶりの会話が弾んだ。飛鳥荘は猿沢池畔にあり、会の終了後、興福寺などの散策を楽しむことができた。

同窓会本部から若尾賢治会長、東京支部から愛知紘治会長、前原金一副会長、そして、学校からは、この4月に着任されたばかりの下畑五夫校長と同窓会担当の加藤妙子先生が参加された。恒例のフォーラムでは、猪飼健夫さん（2回生・和歌山高専教授）に、NHK教育テレビロボットコンテストへの参加経験を素材にしながら、高等工業専門学校の歴史と現状、今後の課題、とくに若年技術者養成の課題について興味深いお話をいただいた。

今回の総会には全体で31名の参加があった。近年の例では比較的多い方だといえる。この傾向を維持すべく工夫をしていきたいと考えている。

母校における講演と模擬講義

加藤哲太（6回生・東京薬科大学薬学部助教授）

7月14日多治見北高校において総合学習の時間をいただき、教壇に立たせていただきました。90分をめぐり内容はまかせるとのことでしたので、高校生に研究の面白さと薬学に対する興味を持ってもらえるようにと考え、講演「食品と癌」と模擬講義「肝臓の働きと薬」を用意しました。

講演は午後1時より開始。ほとんどが医療系を希望している生徒たちということで、非常に熱心な態度で参加してくれました。講義終了後も、医療のこと、薬学のこと、薬の副作用のことなどについて質問があり、最後には薬学における自分の夢まで熱く語ってしまいました。当然のことながら時間も予定を30分ほどオーバーしてしまいました。

後日、下畑校長先生からお手紙を頂きました。その中で講演に参加した生徒の声を知らせて頂きました。「大変貴重な話を聞くことができた」「癌になる人とならない人の違いがわかった」「同じような症状の人が同じように薬を飲んでも、人によって効き方が違うなんて知らなかった」「薬剤師を目指しているのでとても参考になった。先生が話されたように、薬を

求めてくる人に人間として信頼される薬剤師になりたいと思った」。これらの声の中に自分が伝えたかったことは、ほぼすべて含まれています。これは講演をして最も嬉しいこと、生徒たちに感謝します。

久しぶりの母校ということで少し緊張して出かけていった講演でしたが、楽しいひとときを過ごさせていただきました。結局のところ、生徒さんを含め、一番楽しんでいたのは自分ではなかったかと思っています。



模擬講義を行う加藤氏

同窓会便り

第1回生 還暦旅行

中嶋正人（1回生）



翌日はゴルフ組と観光・買い物組に分かれ、1日を楽しんできました。

定年を迎えた者、商売を息子に託さんとする者、なおしばらく頑張らねばという者などそれぞれが、人生の節目を乗り切らんとしている日々であって、しばしの骨休めをさせてもらったのでした。

温泉でくつろいだ1回生の還暦旅行

第1回生は今年3月までに全員が還暦を迎えました。何やかやと行事の多い1年を過ごしたわけですが、昨年11月3日から1泊で、多治見北高1回生還暦旅行が行われ、同期生40数名が参加しました。東京支部から参加の4名は、名古屋近辺在住の同期生とともに、多治見から来た観光バスに名古屋駅でピックアップされ、一向に加わりました。バスの中はすでに酒も入ってにぎやかでした。

一行は岡崎で昼食後、徳川家菩提寺である大樹寺を見学、さらに八丁味噌製造元に立ち寄り、蒲郡・西浦温泉に向かいました。

宿泊のホテル「末広」では、同期生T氏が支配人をしており、大サービスの歓待を受けました。温泉にゆっくりつかり、宴のあとも遅くまで懐かしい話に花を咲かせました。

区切りの同窓会 60歳を迎えて

田中礼吉（2回生）

今年は、イラク戦争、北朝鮮の核問題、新型肺炎SARSなど、危機の1年でした。日本国内でも、バブル崩壊後10年以上停滞が続く、未だ回復の兆しは見えません。終身雇用からメイン・バンク制まで、かつては当たり前であったことも今では通用なくなりました。

高度経済成長から現在のような経済危機の時代まで、急激な変化のなかで、それぞれの職業とそれぞれのポジションで戦ってきたわれわれ2回生は、早いもので今年で60歳、還暦を

同窓会便り

迎えることになりました。定年で退職したり、あるいは今までと全く違った職場に転職したりと、第二の人生を歩みだしている人も多数います。

中でも、山内大二郎君はダスキンを定年となり、米国籍があるのでハワイに移住することになったということで、送別



大いに語り合う2回生の面々

会を兼ねて2回生の同窓会を開くことになりました。小栗英夫君（東京都庁退職後、東京産業廃棄物協会専務理事）の骨折りにより、2月28日、築地市場の中にある「魚四季」で同窓会を開催しました。新鮮な魚料理を中心に、大いに飲み、食べ、昔話に話を咲かせました。

今回特に感じたことは、何か楽しみを持って仕事と趣味を両立させるような「ゆとりのある生活」をどのように送っていったらいいのか、皆が60歳を区切りにもうひとつ区切りを考える歳になったということです。私の場合には、25年以上にわたって、東京中野リトルリーグ（硬式の少年野球チーム）の役員として、ボランティア活動を続けていますが、これが私の趣味となっています。チームの運営では頭を悩ませますが、グラウンドで子供たちとともに汗を流しながら、子供たちの成長を見ていると、仕事の疲れもとれて健康によい生活を送れます。

2回生は、首都圏に約30名おりますが、集まるメンバーはほぼ固まってしまっています。毎年1回以上は集まりたいと考えてますので、これからも多くの人にお集まりいただけるよう呼びかけていきます。皆さん、ぜひご参加下さい。

8回生学年同窓会に参加して

萱原 昇（8回生）

昨年9月21日、前日、東京での仕事を終えて最終の新幹線で名古屋に帰り、眠い目をこすりながら、最寄りの千種駅から中央線に乗る。列車が、未だ紅葉にはいっくらか早い定光寺、古虎溪の山の木々を車窓に写しながら、最後のトンネルを抜ける。多治見の街が車窓にひろがる。何となく気持が高ぶって来る。“北辰、恒に座を変えぬ”北高を卒業して、早や35年、今日はその35年振りの8回生学年同窓会の日である。



多治見で開かれた8回生の34年ぶりの同窓会

クラス毎に集まったテーブルで乾杯と共に、宴が開始される。幹事団が用意してくれた卒業写真を見ながら、自己紹介しながら、また他のテーブルを回りながら、食事とお酒に昔話の花が咲く。皆笑っている。皆懐かしい日々を懐古している。そして皆幸せそうだ。あっという間に時間が過ぎ、校歌を大声で歌い上げ、お開き。5年後の再会を約して、各クラス

毎の二次会に散る。

本当に充実した素晴らしい一日だった。帰宅してしみじみと考えた。同窓生一人一人にそれぞれの“35年という人生”があり“人の歴史”があった。今日一日、お互いの青春時代をシェアした皆と再会し、思い出に浸ると共に、何かこれからの人生に、フレッシュな気持ちで立ち向かう新しいエネルギーが湧くのを感じた。これが同窓会の本質かもしれない…。

最後に、この機会は各クラスから男女一名ずつのクラス幹事が、それも殆どの方が自ら名乗り出て企画してくれたと聞く。名簿の整理・調査から始まり、連絡・会場の手配まで本当に献身的に尽力していただき開催されたと思う。心からお礼を申し上げたいと思う。

東京支部8回生で3度目の忘年会

可児重昭（8回生）

昨年末、東京駅近くのお店の数室ある洋風個室の一室で、東京支部会8回生の忘年会を行いました。

きっかけは、名古屋在住の8回生が、昨年の東京支部会総会に出席、懇親会後の二次会で彼の提案でした。東京支部会8回生での忘年会を開催しようというのです。彼の総会への出席は、思わぬ出来事でもあり、30余年振りでの旧交でした。その他にも数十年ぶりという顔ぶれの参加者もあり、同窓会での繋がりとその繋がりでの展開、更には今のご時世をもまっさに見せつけられた、大変有意義な忘年会でした。

この忘年会の出席者は、総勢15名程でした。2～3年前から、例えば鎌倉のお店に夕方現地集合解散、それ迄は自由行動での東京支部8回生の同窓会企画も持上っております。

割と若い人中心の飲み会やっています

早川克也君（16回生）、鈴木淳平君（17回生）らを中心に数年前からほぼ2ヵ月に1度のペースで、飲み会をやっています。新宿の「アジア共和国」という店がほぼ定宿で、入れ替わり立ち替わりで毎回10人ほど集まります。上が12回生から下は41回生まで比較的若い人たちが中心です。（12回生 原田記）



4月24日の飲み会

モスクワ街角事情

水野正城 (2回生)

ソ連邦が崩壊した後の、戦後支援の一環として、大量破壊兵器研究の従事者を平和的な研究に従事させ、市場経済に導き、西側の研究世界と交流を深めるよう、ロシア、米国、EU、日本、スウェーデンなどが基金を出し合い、国際科学技術センターを設立したのは1994年のことである。これにより、ロシア、カザフスタン、グルジア、アルメニア、キルギスタンの研究機関に研究資金を援助することになった。日本は当時の外務省、科技厅、通産省が管理組織となり、職員4人を派遣している。私はこの交代要員として平成13年5月、単身モスクワに渡り、研究プロジェクトの実行管理にあたった。

私が最初にモスクワを訪れたのは、この1年前、日本で世話をした同業者のコトフ一家をモスクワ郊外の研究都市チェルノゴルフカに訪ね、町を案内されたときである。遠目には高層アパートの建ち並ぶ町も、研究所の敷地を囲むコンクリート塀の上には赤錆た鉄条網が張り巡らされ、入るときは職員といえども証明書を提示し、荷物検査を受ける。さながら刑務所か収容所に入る心地だ。案内された科学物理研究所の建物はこの10年補修が行われた様子もない、殆ど廃屋同然の平屋。錠を開けて中にはいると、それでも暖房は効いているらしくほのかに暖かい。ピーカーも必要な試薬もろくにないが、なんとか国際会議で発表できる程の成果を出しているのは、これまでの蓄積のせいだろうか。研究所の経営は苦しく、光熱水料と職員の僅かな給与以外は、外部資金を当てにする他はない。首切りはないが、良いポストがあいていても学生は給料の多いビジネスのほうへ流れるということである。

モスクワの町で目につくのは警官と物乞いの多いことだ。警官は地下鉄のホームや出入り口、人通りの多いところなどでにらみを利かせている。チェチェン人などのテロを警戒してのことと言われるが、東洋人もお構いなしだ。まず、証明書(滞在許可証)を見せろとくる。毎日昼食をとる駅前のレストランへ行く途中に派出所がある。この前辺りでしょっちゅう尋問に遭う。2週間に1度くらいの割合である。ある時、パスポートのコピーしか持たなかったとき、これに肝心の滞在許可印の部分が写っていなかったために、同僚は無事だったが僕だけは例の派出所に連行され、そのまま鉄格子の留置場に鎮座する羽目になった。所持品の検査を受けているとき、急をきいてパスポートを携えて駆けつけた担当者によって無事救出される一幕もあった。

地下鉄の連絡通路やホテル、教会の前にはおばあさんや寡婦、身体障害者などの喜捨を求める姿をよく見かける。それに生き倒れになったような人もよく見かけた。とはいうものの学問芸術のレベルは高く、家族の絆も強く子弟の教育に一生懸命で、困っているときは融通しあい、よりよい生活を目指して努力している姿は世界共通であると思う。

次世代へ美しい地球を…

浅井弥生 (4回生)

人生の折り返し地点を過ぎ、身体的、精神的そして社会的に健康に生きることを考える年代になりました。そんな時期に「幻のキノコ」或いは「森のダイヤモンド」といわれるチャーガと言うキノコに出会いました。寄生した白樺の樹液を吸い上げ10年～15年かけて成長する生命力溢れるチャーガから健康食品を作り販売する仕事に従事することになり、改めて健康と自然環境を考えるようになりました。

私たちの社会はますます便利になり物が溢れ豊かになっています。その豊かさを維持するために人間が作り出した合成

化学物質が、繁栄に反比例し環境を汚染し地球を破壊へと向かわせています。自然界に存在し得ない合成化学物質は一見無害に見えても基本的に有害に作用すると日本産業衛生学会会長、久保田重孝医学博士は述べています。現在、地球上の生物、植物、動物といった生命体はバランスを失いつつあります。繁栄する社会は、汚染された水、有害な食品添加物、加工食品、大気汚染等を産みだし、私たちは知らず知らずの内に複雑に絡み合った有害化学物質の中毒患者になってしまっているともいえます。

例えばドイツ人著「悪魔のナベ」の中で年間一人あたりの食品添加物の摂取量がドイツ人約19kg、英国人24.0kg、オランダ人ほぼ30kgと記されています。日本はオランダよりGNPが高く、加工食品も多いことから摂取量はオランダより多いと予想されます。もちろん大半は体外に排出されますが、一部は体内に残留し蓄積されます。これらが原因ではないかと疑われる疾病も多く、新しい病気、新ウイルスの出現も続いています。このような状況下、人間に備わっている体を防御する機能、免疫力は低下しています。

世界の環境を考える京都会議では、美しく生命力溢れる地球に戻れなくなる時間を真夜中の12時とすれば、地球破壊度を測る環境時計の針は、既に夜の9時45分過ぎを指していると発表されました。時計の針は戻せるのでしょうか。21世紀は、生活の豊かさ、便利さを追求してきた20世紀を反省し自然との調和を考える時代となるのでしょうか。私たちは美しい地球を次世代に残す義務があります。それには、まず私たち一人一人が環境を考え健康に生きることではないでしょうか。薬づけの半病人がいくら平均寿命を延ばしても哀しいだけです。薬に頼らない自然治癒力による健康維持を真剣に考えなければならぬと思っています。

地方議員になって

水野義裕 (3回生)

この4月の統一地方選挙で、会社を辞めて東京都羽村市の市議会議員になりました。

羽村市は東京の西に位置し、米軍横田基地がある福生市とマラソンで有名な青梅市にはさまれた、人口5万7千の小さな街です。350年前に開通した玉川上水の取水口があることで知られています。東京駅からは中央線で立川へ53分、立川から青梅線で羽村まで20分です。

市内は大きく旧市街地と、整備された新市街地に分けられ、新市街地には日野自動車やカシオ、日立国際電気などの工場があります。都心に通う市民もいますが、職住近接で地元で働いている市民も多くいます。

立候補したのは、停滞する議会に新しい風を吹き込み活性化したいと考えたためです。長いこと地域活動(町内会、PTA、青少年の健全育成など)をやっていて、そこで見てきた様々な問題に対処するには議員になるのが良いと判断しました。

公約として次のような点を掲げました。

- ・生涯学習環境の充実
- ・安心して子育てができるしくみを
- ・行政サービスに情報技術を
- ・市議会の改革

羽村はまだまだ古い体質(お上意識と言ったようなもの)が残っています。旧市街地の区画整理が当面の大きな課題ですが、市当局の進め方には問題点が指摘され、裁判沙汰になっています。こんな状況を打破し、市民に開かれた行政が展開されるよう、市政をチェックする役割をきちんと果たして行きたいと考えています。

『三位一体の改革』あれこれ

杉本達治 (21回生・総務大臣秘書官)



衆議院総務委員会で答弁中の片山大臣 左後ろが筆者

皆さんは『三位一体の改革』という言葉をご存じでしょうか。最近特にマスコミをにぎわしている小泉改革の一つの大きな柱です。私は片山虎之助総務大臣の秘書官として、わずかながらこの改革に携わってまいりましたので、今回はこの改革について少しお話をさせていただきます。

もともと『三位一体』というのは、キリスト教の『創造主としての父なる神とその子キリストとその連絡をする聖霊とが唯一絶対の神の三つの位格（ペルソナ）であり、三者は一体である。』というように教わったかと思えます。それが、昨年5月21日の経済財政諮問会議で片山大臣から『国庫補助負担金の改革』、『国から地方への税源移譲』、『地方交付税の見直し』を三位一体で進め、地方分権を一層推進し、国と地方の財政運営の効率化を図ろうと提案し、その後6月に閣議決定され、今日の大きな流れとなっているものです。

私も県庁や市役所に勤務したことがありますので、その経験から申しますと、国の補助制度のある事業については、多少の無駄があっても最優先で予算措置を行ってしまいます。本当は修繕して使った方が安上がりであるとわかっている施設でも、補助金は新築のみが対象となるため、結局無駄を承知で建て替えることになってしまうわけです。国・地方の借金の合計額が700兆円に迫る中で、これでは全くの無駄遣い。税金の垂れ流しになります。そこで、『地方でできることは地方にやらせる（小泉総理）』という観点に立って、より効率的な財政運営を実現することを狙ったわけです。

ただ、この改革は一筋縄ではいきません。塩川財務大臣が小泉総理の面前で怒鳴り合ったり、地方分権改革推進会議が西室議長や水口議長代理の非民主的な運営で紛糾し、その意見書の内容が分権とは名ばかりの国の主張を代弁するばかりのものとなったり、削減する補助金の項目の取り扱いについて族議員の抵抗で骨太方針2003の閣議決定が遅れ、内容も変更させられたりと、決定に至る過程では、相変わらずのドタバタぶりが報道されました。

しかし、だからといって改革が進んでいないわけではありません。というより、戦後50年以上もの間手つかずだった国と地方の基本的な関係を変えようという大改革なのですから、簡単にできるわけがありません。拙速に行えば必ずどこかで歪みが生じ、住民の皆さんにもご不便をおかけします。したがって、ある程度の時間をかけて詳細な検討が必要だと思えます。それに、何より年末の予算編成時期でないとい具体的な制度の仕組みは決められないわけで、今の時期は各省の概算要求に向けた枠組みが整っていれば十分とも言えます。いずれにしても、今年の年末にかけては三位一体の改革の中身をめぐって、総務省対財務省、総務・財務両省対各省庁、小泉総理対族議員（反対勢力）といったバトルがマスコミを賑わすことは間違いありません。それだけ、『三位一体の改革』の言葉をあちこちで目や耳にされると思えます。

私もいつまで今の職にあるかはわかりませんが、微力なが

皆さんは『三位一体の改革』という言葉をご存じでしょうか。最近特にマスコミをにぎわしている小泉改革の一つの大きな柱です。私は片山虎之助総務大臣の秘書官として、わずかながらこの改革に携わってまいりましたので、今回はこの改革について少しお話をさせていただきます。

ら三位一体の改革の推進のために力を尽くしたいと思います。皆さんも応援をよろしくお願いいたします。

多治見北高に期待すること

愛知正温 (41回生)

今世紀前半に日本が直面する問題は、三つの「K」すなわち、「環境」・「経済」・「教育」である。どれも切実な問題であるが、今まさに現場にいるということで教育の問題について考えてみたい。

現在の青少年の問題点は、大きくは「自信がない」こと、「言語によるコミュニケーション能力が低い」こと、「居場所が学校にも家庭にも職場にもない」ことである。この三つを前提に立って分析すれば、一般に問題とされていることはほとんど説明がつく。テレビを賑わしている様々な事例に当てはめてそれを確認してもらいたい。さらに、なぜこれら三つの問題点が発生してしまったかという経緯を考えれば、今後の教育の方向性は自ずと見えてくるはずである。

一つだけ例を挙げよう。実は、入学して初めて知ったことであるが、東大でも全く同じことに頭を悩ませている。客観的に見て東大生は文句なく優秀であるが、自分のことを優秀だとは思っていない。むしろ、いつ「おまえはできが悪い」と言われるかと怯えているぐらいである。本来であれば、その頭脳を社会のためにいろいろ使ってもらいたいところだが、そんなわけで気持ちが守りに入っているから、自分のためにどう使うかでいっぱいいっぱいである。どちらが鶏か卵か知らないが、自信がなくて自分が他人のために役に立つと思っていないから、自分のためにある程度の地位を確保することが人生の目的になってしまう。従って、やや逆説的ながら、恐ろしく控えめで謙虚であり、かつ自己中心の人物ができあがるのである。優秀なのにパイオニア精神がないと教授は嘆いているが、その内実はざっとこういうことだ。

さてここで、北高生はどうだろう。北高生に言語能力の不足ということや居場所がないということは、将来的には注意しなくてはならないが、現時点ではまだ少ないだろう。それよりも自信のない北高生が問題である。しかしながら幸いなことに北辰祭を通して多くの北高生は「自分には何ができるか・どう役に立つか」を知り、自信を身につける。そこそが、東大の例を見たように、他の大手進学校と違って、北高がリーダーを育てられる理由である。北高は、こういうところをもっと大切にしないといけないと思う。

稲川氏 (12回生)

「セラミックパークMINO」で講演

去る7月5日、「セラミックパークMINO」（多治見市）の岐阜県現代陶芸美術館において「セラミックパークMINOの愉しみかた」と題するセミナーが開催され、稲川直樹氏（12回生）が講演した。同美術館の教育活動の一環として月一回程度行われているセミナーの第2回ということで、午後2時から同館内の「プロジェクトルーム」（展示、レクチャー用の多目的な小部屋）で行われたものである。

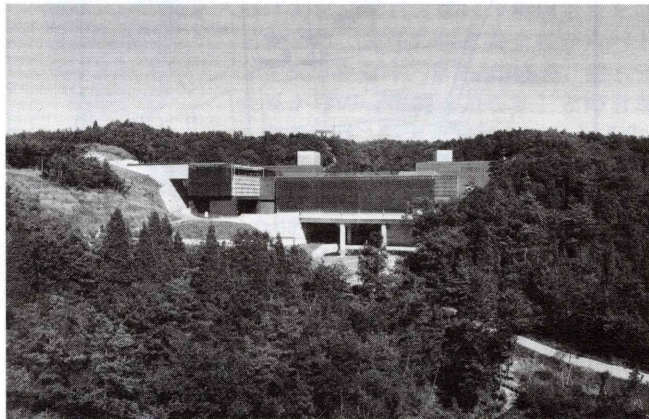
100名を超す参加者は室内に入りきれず、前室にモニターを置いて中継するほどの大盛況だった。「磯崎新アトリエ」で同館の建築設計・工事の責任者として携わった稲川氏は、スライドを駆使しながら、敷地の特性、設計内容、参考にした建築、吊り免震構造のしくみと実現への道筋など、設計案の背景や工事の苦労話を披露した。1時間半程の講演の後、参加者

の質問に答えた。

セミナーには北高同窓生の参加も多く、稲川氏の話になるほどと感心しきりであった。(12回生 原田記)



「セラミックパークMINO」で講演する稲川氏



「セラミックパークMINO」

セラミックパークMINO

稲川直樹 (12回生)

「セラミックパークMINO」は21世紀の美濃焼きと現代陶芸を世界にアピールする場として十数年前から岐阜県と東濃三市一町によって計画推進され、昨年10月「第6回国際陶磁器フェスティバル美濃」とともに開館した。主要施設は、近現代の国内外の陶芸作品や実用陶磁器を収集展示する「現代陶芸美術館」と、展示ホールを中心としたメッセ機能をもつ「オリベスクエア」で構成されている。偶然にも地元出身の筆者は1996年以来磯崎新アトリエの担当者として計画に参加し、その後三年間の設計と二年間の工事監理を経験する機会を得た。

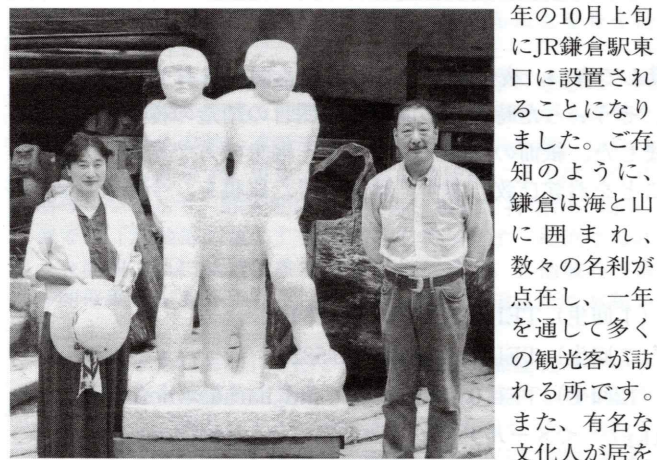
配置についてはまず、敷地が緑深い大小三つの谷間にまたがっており、また周辺の自然環境が確実に減少しつつあるとの認識から、山を削り谷間を埋めて更地を作る従来の手法はやめて、地形や植生をできるだけ保存しながら建物を挿入する方針が決定された。敷地への入り口と駐車場は北に取り、絶滅危惧種のシデコブシが多く自生する谷を保護する目的で、来館者用の橋とトンネルで敷地南の施設本体とを結ぶ。建物は主要な機能である美術館の主展示室と展示ホールを積み重ねて基本構成とし、その上は屋上広場、下はカスケード広場と名づけられる外部空間として整備された。谷間上流側は池とカスケードの中庭となり、その周りにはロビーや会議場、レストラン、茶室、展望台が配されている。来館者はトンネルから屋上広場を歩き回って初めて、施設の大きさや水を使った外部空間、それを囲む様々な大きさと形の建物群を認める。外部仕上げには地元産の焼き物による日避けや煉瓦、タイルが多く使われ、その周囲の自然に溶け込むような渋い色が採用された。

計画の当初からメッセと美術館、つまり産業と芸術を同居させるだけでなく、相互に刺激を与え合い活性化を促すような空間が目指された。このためメッセの上に浮かぶ美術館展示室には敢えてガラス壁面が多用されている。この展示室は、屋上広場を支える梁から文字どおり吊り下げられており、ゴンドラのように地震時の揺れをほとんど展示床に伝えないという、これまでにない免震構造を実現している。

鎌倉駅に少年像を設置する会 へのご協力のお誘い

可児和子・大嶽節洋ほか7回生有志一同

北高に彫刻作品「無限」(黒御影石の天女像)を寄贈し、また、同窓会の幹事もされている7回生の岩田実氏の作品が、今年



岩田さん夫妻と少年像

の10月上旬にJR鎌倉駅東口に設置されることになりました。ご存知のように、鎌倉は海と山に囲まれ、数々の名刹が点在し、一年を通して多くの観光客が訪れる所です。また、有名な文化人が居を構え、文化施設も多くあります。しかし、鎌倉駅には文化の香りのするものは特になく、雑然としていて、文化都市鎌倉の表玄関とは言い難いものです。岩田氏は、20年以上も鎌倉の地で彫刻作品を制作する傍ら、地元での文化活動にも力を入れてきました。そして、この度、鎌倉のさらなる発展を願って、駅に作品が設置されることになりました。(JRに寄贈するという形ですが。) 作品名は、「友情」(白御影石・台座込み約2mの少年二人像)です。また、これに伴い、物心両面から作品設置の支援をしていくため、「鎌倉駅に少年像を設置する会」が発足しました。この会では、今、少年像設置及びその後の維持管理に必要な経費を少しでも多く賄うために、募金活動をしています。鎌倉とご縁の深い東京支部の同窓生の皆さんにも、この趣旨をご理解いただき、賛同の輪を広げていただけたら幸いです。どうぞ、よろしく申し上げます。

賛助金 一口2000円

振込先 ①郵便振替00210-3-38639

②横浜銀行鎌倉支店(普) 1377345

名義 「鎌倉駅に少年像を設置する会」

お問い合わせは、事務局 TEL.0467-25-5329まで。

なお、除幕式は10月10日(金)の予定で、岩田氏のホームページで関連記事などが見られます。

第14回東京支部総会・懇親会のご案内

会員の皆様には益々御清祥の事とお慶び申し上げます。
 いつも何かと支部運営にお力添えいただき有り難うございます。
 さて、本年も総会・懇親会を下記の要領で開催いたします。
 時節柄御多用とは存じますが同窓の方々をお誘いあわせの上、ご出席下さい。

多治見北高同窓会東京支部総会実行委員会
 (4、14、24、34回生)

記

日時：2003年11月8日(土) pm3:00~7:50

受付 pm2:30~

総会 pm3:00~3:30

議長選出 活動報告 会計報告 その他

フォーラム pm3:30~5:00

1. 「やきものと酒道」

陶芸家 加藤幸兵衛氏 (4回生)

2. 「イラストレーターの仕事語る」

イラストレーター 佐々木悟郎氏 (14回生)

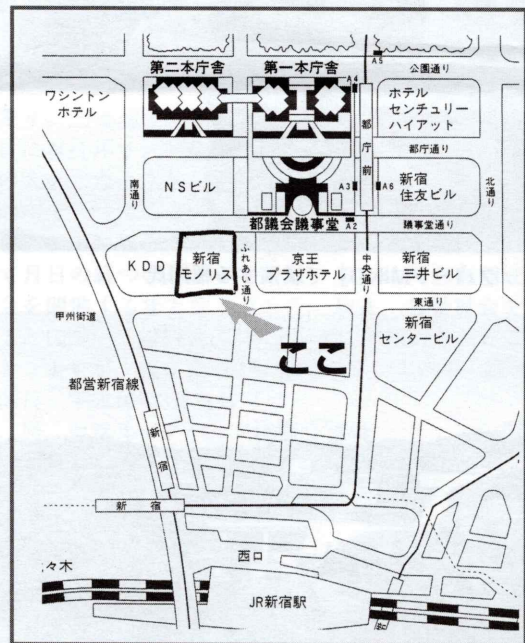
懇親会 pm5:15~7:50

会場：モノリス29

新宿区西新宿2-3-1 モノリスビル29F

(03-5381-9229) JR新宿駅西口から徒歩約10分

※会場までの道筋は、案内図をご覧ください。



- ・懇親会費 一般7,000円 学生4,000円
(新卒業生は、無料)
- ・年会費 一般3,000円 学生1,000円
- ・今年も同窓会本部より若尾会長、尾関副会長、母校から下畑校長先生、楓先生(20回生)、恩師の大角先生、石王先生(英語)などの方々をお招きする予定です。
- ・出欠のお返事は、準備の都合もありますので10月25日までにお願い致します。



昨年のフォーラム(上)と懇親会(左)

編集後記

9月の横浜の空は、本当にティツィアーノの筆さばきの様に澄んで青い。夜は何処からともなく頭上に月光があり、その神々しさに見とれる。都市に生き、しかも自然に感動する、そういった時の心の開放感は明日の創造の糧となる。さて、今回の「北辰」には予想を遥かに上回る数の原稿を頂きました。紙面の関係上、やむなく編集の方で原文の一部を省略させて頂きました。文章の感じが変わったかもしれないことをお詫び致します。時宜を得た原稿を、今後もお寄せくださいます様、宜しくお願い致します。(岩田)

編集委員(連絡先)

〒338-0001 埼玉県さいたま市上落合2-11-7 2107 愛知紘治(1回生) TEL/FAX 048-855-7840

〒247-0062 神奈川県鎌倉市山ノ内67 岩田実(7回生) TEL/FAX 0467-25-5329

〒131-0043 東京都墨田区立花6-8-1-304 原田英明(12回生) TEL 03-3616-5398 md_harada@hotmail.com

<ホームページアドレス>http://members.aol.com/takitatky/ <メールアドレス>takitatky@aol.com